

社会科

新谷 和幸・中丸 敏至・迫 眞也

I. はじめに

東雲小・中（以下、本校）社会科部では、昨年度まで「東雲小・中7年間における社会科の学びが広がる授業づくりのあり方」をテーマに研究を行ってきた。児童・生徒の社会科における課題を洗い出し、子どもの社会認識や社会に関する諸力だけでなく、社会科に対する関心や自信も高められるよう、めざす子ども像を設定し直した。また、先の課題を解決する手立てとして、子どもが「社会を学ぶ知的好奇心」、「クラスという社会で学び追究する意欲・態度」をもち続け、高め合うことのできる授業づくりに着目し、内容面では子どもが社会を知り分かる授業、方法面では子どもが学び合い探究できる授業となるよう、授業実践を積み重ねてきた。

今年度から本校では、新たに『グローバル時代をきりひらく資質・能力』を培う教育の創造というテーマの基、社会のグローバル化を踏まえ児童・生徒の協働的問題解決を視野に入れながら研究を行っていく。グローバル化に伴う社会問題は、既存科学の範疇だけで解決できない場合が多い。そのため、現在トランスサイエンスの観点を踏まえ、様々な立場から子どもに育むべき資質・能力が提言され、それらを効果的に育むための方法的研究が行われている。社会科は、地理学や歴史学、経済学などの社会諸科学の成果を踏まえた教科である。この点を考えると、社会科学という領域の中ではあるが、ある意味トランス的な要素を踏まえた教科（学問）と言えよう。本研究では、社会科における教科の特性を生かしつつ、これまでの成果や本校の実態を基に、既存の教科・領域の枠組みの中でグローバル時代をきりひらく汎用的な資質・能力を系統的に育むための授業のあり方について検討していく。

内容教科である社会科は、子どもの社会認識を通して公民的資質を育成する教科である。つまり、社会の見方となる一般性のある知識・概念（内容知）の獲得を通して、児童・生徒に未来社会の形成者としての資質・能力（方法知）を育てていく。そのため、社会科においてグローバル時代をきりひらく資質・能力を吟味・検討する上で、児童・生徒の社会認識形成を切り離して考えることはできない。現在、国教研を中心に汎用的な能力を育むためのカリキュラム編成が模索されているが、能力ベースの内容設定の傾倒は社会科の内容教科としての特性や教科としての独自性、存在意義を考えた場合、いずれ社会科固有の内容でなくてもよいということにもなりかねない。また、今回の学習指導要領では道徳が政治主導により教科化される。戦後の道徳の特別領域化や今回の教科化の成立過程を踏まえると、社会科における社会認識形成という観点は、子どもに客観的な社会の見方を通して民主主義社会の主権者としての資質を育む上で、今まで以上重要となるであろう。

今後、グローバル化に対応した教育過程を構想する上で、教科を横断する汎用的な資質・能力を育むのであれば、「教科の本質」として子どもへの社会認識形成を大切にしながら、教科の独自性の観点から、社会科でこそ育むべきグローバル化に対応した内容や資質・能力を明確にすることが必要となろう。

そこで、本校社会科では、『グローバル時代をきりひらく資質・能力』を育成する授業のあり方を探る上で、以下の2点を基に検討することにした。

- ①グローバル時代をきりひらく資質・能力を、社会科で育む公民的資質や学力を踏まえ検討する。
- ②グローバル時代をきりひらく資質・能力を育成する授業づくりとして、子どもの発達段階を踏まえ、内容面と方法面の双方向で検討する。

II. グローバル時代をきりひらく資質・能力と社会科で育む資質や学力との関連性

本校では、グローバル時代をきりひらく資質・能力（以下、グローバルな資質・能力）を「様々な文化や価値観を理解し認め合いながら自分の考えを明確にして問題解決する力」と定義した。これは本校9年間の教育課程でめざす子ども像「共生社会をたくましく生き抜く人間力豊かな人間エリート」の実現に必要な「①多様性」「②主体性」「③協働性」の3つの観点と対応している（表1）。

他方、社会科では、「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」ことが教科の目標として挙げられている。公民的資質に関しては、昭和43年度版小学校指導書社会科編で「市民社会の一員としての市民、国家の成員としての国民という2つの意味を含んだことば」として「公民」の意味が示されている。故に公民的資質は「市民」と「国民」の2つの要素を

表 1. グローバル時代をきりひらく資質・能力

【グローバル時代をきりひらく資質・能力】	【めざす子ども像を育む力】	【社会科における評価の観点】
①様々な文化や価値観を理解し 認め合いながら ②自分の考えを明確にして、 ③問題解決する力	「多様性」 「主体性」 「協働性」	「関心・意欲・態度」 「思考・判断・表現」 「資料活用・観察」 「知識・理解」

含み込む態度・能力を示す概念と言える。しかし、これまで社会認識との関連や社会形成者のとらえ方の違いから、様々な内容が検討がされているものの明確な定義はない。時代によって社会が変化することを考慮すれば、むしろ具体的且つ明確に定義できないものとも言える。

ちなみに、平成20年度版小学校学習指導要領解説では、公民的資質について、部分的ではあるがその内容を示している。この内容を分析すると、①社会の形成者としての自覚、②自他の人格を互いに尊重し合う点、③社会的義務や責任感、④多面的な思考、⑤公正的な判断、⑥主体的な社会参画、が示され、先の「多様性」「主体性」「協働性」の3観点を踏まえた内容であることがわかる。ここでは、国際社会や持続可能な社会を意識した文言もあり、地域市民、日本国民としてだけでなく、地球市民という観点を踏まえた資質育成の必要性も窺われる。このことから、社会科の目標に示す公民的資質には、既にグローバルな市民としての資質・能力も包含されていると言えよう。

また、日々の社会科授業で育む学力の観点からグローバルな資質・能力を考えると、それを育むには「関心・意欲・態度」「思考力・判断力・表現力」「資料活用力・観察力」「知識・理解」のいずれの学力も必要不可欠と言える。例えば「様々な文化や価値観を理解し認め合う」には、世の中にどんな文化や価値観があるのか、「関心」をもって「資料活用・観察」しながら「意欲」的に調べる必要がある。また、それらがどのようにして形成されたのか、「思考・判断」し「知識」として獲得する必要もある。さらに互いの文化や価値観を認め合うには、獲得した知識を基に自他の立場を踏まえ言葉を選び「表現」し、互いの文化や価値観を「理解」し認める「態度」も必要だからである。

このように、社会科は「社会を学ぶ教科」であり、「未来社会の形成者としての公民的資質を育む教科」であるが故、既に授業を通してグローバル時代な資質・能力を育む基盤はできている。今後社会科において、グローバルな資質・能力をこれまで以上に育んでいくためには、その必要性を子どもが実感できるような授業にするための内容面の検討と、それを生かすための方法面の検討が必要と言えよう。

Ⅲ. 子どものグローバルな資質・能力を育むための社会科授業基盤

1 「教育内容の論理」と「子どもの心理」を結びつける問題解決的な授業づくり

社会科授業を通してグローバルな資質・能力を育むには、内容教科としての社会科の特性や社会科で育む資質や学力との関連性を考えた場合、やはりこれまで同様、問題解決的な学習が基本と言えよう。なぜならこの学習は、子どもの課題解決における主体的な探究活動を通して、社会の見方となる知識・概念をある程度効率的に獲得させる上で、有効な学習形態だからである。これは、子どもの「社会認識形成」を通して「公民的資質の育成」をめざす社会科の本質を踏まえ、これまで本校社会科部が「教育内容の論理『に』子どもの心理を結びつけた授業づくり」を継続して行ってきたことと関連する。

しかし、今まで以上子どものグローバルな資質・能力を育むには、本校社会科部の問題解決的な学習における考え方を見つめ直す必要があるだろう。そこで、学びの主体である「子どもの」、「子どもによる」学びを育められるよう、本校社会科部では「教育内容の論理『と』子どもの心理を結びつける問題解決的な社会科授業づくり」をめざす。そのためには、課題把握、課題追究、課題解決といった一連の学習過程を通じて、どれだけ子どもの主体性を維持しながら授業展開することができるかが鍵となるだろう。

これまで通り、子どもの社会の見方となる教育内容を育む上で、知識の構造や問いの構造を行う一方、その中に児童・生徒の素朴な問いや疑問を関連づけたり、今まで以上に児童・生徒の心理に沿った弾力的な学習過程、授業展開を行ったりすることが必要となるだろう。

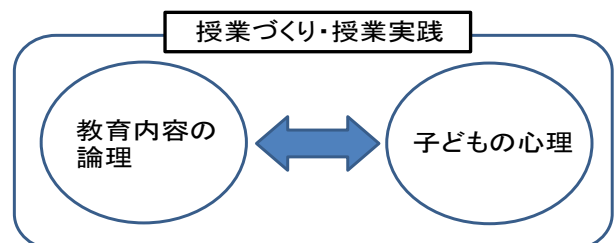


図 1. グローバルな資質・能力を育む授業基盤

2 子どもがグローバル化する社会をとらえるための枠組み

次に、グローバル化を踏まえどのような社会を対象にして、子どもの社会認識形成を図る必要があるのか。社会のグローバル化をとらえる新たな初等社会科授業開発をめざした広島大学・附属小3校の共同研究の成果を踏まえ検討した。

ここでは、先行文献を基に、現代のグローバル化を「情報通信技術の進展、交通手段の発展、国際的市場開放を起因として、人、物資、情報の国際的移動、相互依存性が活性化していき、経済面・文化面・環境面に対する社会問題を生じさせる現象」としてとらえ、児童・生徒の発達段階を考慮し、既存社会の観点からグローバル化によって社会問題が発生するメカニズムについて検討を行っている。

ここでの既存社会は、児童・生徒が所属する国レベルの範疇の社会を想定している。そこでは、自国の社会の維持・発展のために、経済や文化、環境面で様々な取り組みが行われ、問題が発生した場合でも各領域の取り組みを調整しながら自国の範疇で対策を行い、解決していくためのシステムが社会の中に構成されている。これまでの社会科では、それらを教育内容として獲得することで、子どもの社会認識形成を行ってきたと言えよう。しかし、近年、情報化や物流の発展などの社会変化によって、自国の範疇を超えたところから要因がもたらされるようになり、国内問題といっても、国内だけで解決することができない構造となっている。それらの内容を踏まえ、既存社会の観点からグローバル化する社会構造として示したのが図2である。

本研究では、これを「グローバル化する社会をとらえるための枠組み」として設定し、社会認識形成の基盤に据えることで、子どもの社会の見方・考え方を育むことにした。

それでは、どのような社会の見方・考え方を子どもに育めば、グローバル化の進展やそれに伴う社会問題を主体的にとらえ、それらを協働的に考え解決できるようになるのだろうか。

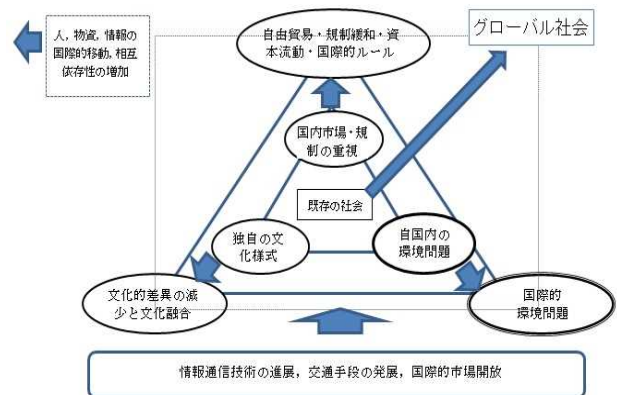


図2. 現代のグローバル化をとらえる社会の枠組み

新谷和幸・中丸敏至・松岡靖・沖西啓子・伊藤公一・木村博一・永田忠道(2014)「グローバル社会に対応した国家・社会の構造を認識する 社会科授業開発-附属小学校3校の共同研究の成果として-」、『広島大学学部・附属共同研究紀要』第42号, p68.

3 グローバル化する社会の見方・考え方

グローバルな問題が生じる背景には、情報化や物流の発展だけでなく、既存社会における社会システムの認識を通して、自国の経済や文化、環境を中心にとらえてきた人々の見方・考え方も大きい。

今後、グローバル化の進展を考えると、私たちの所属する既存社会だけでなく、世界規模の範疇で社会をとらえる見方・考え方も重要となってくる。しかし、地球温暖化などグローバル化に伴う社会問題は、様々な社会要因が複雑に絡み合っており、世界中の地域や国の実情を認識していなければ考えることすらできない。このような社会の見方・考え方を授業で直接児童に育むことは、子どもの発達段階を考慮した場合、中等社会科はともかく、初等社会科では難しいと言える。

グローバル化する社会の様相やグローバルな社会問題が顕在化する仕組み、7年間の社会科の系統性などを考慮すると、社会科では様々な範疇の社会を区別してとらえるのではなく、むしろ先の枠組みで示すように、既存社会の観点からそれらを関連させながら子どもに社会の見方・考え方を育むことが必要と言える。

(1) グローバル化する社会の見方

哲学者の内山は、近代の民主主義国家と昔の農村や職人の世界の比較を通して、民主主義とは「小さな規模でしか機能しない仕組み」と指摘している。社会の範疇が広がるほど人々の結び合いは不明瞭になり、民主主義という欠陥のある制度を顕在化させているとした。これからの社会科ではグローバル化する社会の様相を通して、民主主義社会の構造やそのよさだけでなく、難しさや欠点も含み込んで学ぶ必要がある。既存の小さな社会から子どもに民主主義社会の一員としての資質を育みながら、グロー

バルな社会問題を通して大きな社会における民主主義のほころびや影響をとらえていく。これを可能とする教育内容を「グローバル化する社会の見方」として形成していくことが必要となる。また、内山は主権は「人々の結び合いや関係性の中にある」とし、そのつながりによって共同体をつくり広げることが国家などを相対化し多様で多層な共同体の存在を可能にする、とも述べている。高度情報化によって今日、人々のつながる機会は格段に増えた。既存社会の枠を超えて人々が主体的につながっている。しかしその一方で、反国家的な人々が武力集団を形成し、国家を超えて支配している現状もある。今後社会科ではグローバル化する社会の見方を育む上で、「人々がつながる価値」をとらえていくことも重要となるであろう。

以上の点から、グローバル化する社会の見方を育むためには、教育内容として社会空間の関連性や人々の関係性を含み込んだ知識や概念を設定する必要があるだろう。

(2) グローバル化する社会の考え方

次に、社会科でこそ育むべきグローバル化に対応した資質・能力として、環境学者である阿部の見解を踏まえ、検討していく。阿部は、現代の社会問題の解決を図る上で、人々の共有可能な価値としての「つながり（関係価値）」に着目し、今後人々がつながりを通して様々な可能性から最適なものを選び取っていく「価値判断」のあり方が重要とした。これまで社会科では、価値判断能力を社会の考え方としてとらえ、未来の社会を形成する子どもに育むべき資質としてきた。ここでは、合理的な解決が困難な問題に対して、適切な社会行為を選択していく「個の価値判断」と言える。

しかし阿部は、科学の各専門家や研究者だけでなく、問題に関係する全ての人々を含めた「専門家コミュニティ」で意見交換・判断がなされるべきと指摘した。これは小さな民主主義社会である専門家コミュニティ内での「協働的な価値判断」の必要性を意味すると言えよう。様々な人々と様々な立場を踏まえた協働的な価値判断は、人々が市民社会の一員としてのつながりを意識化する上で重要な活動であり、場合によっては「価値の共創」につながる可能性もある民主主義の方法と言える。人々のつながりへの意識は、児童・生徒の社会形成に関与する上での「社会的義務や責任感」を育むことにもなる。

その一方で阿部は、協働的な価値判断における「知の統合」について、一人一人の研究者の中でしか実現できないものとし、結果が共有されることはあっても、統合への過程は個人の中でのしかない、とも述べている。つまり、集団での協働的な価値判断の基盤は、やはり個人であり、「個の価値判断」を育成がまずは必要不可欠と言える。

今後社会科では主権者となる児童・生徒を育む上で、社会に対する「個」と「集団」での考え方に着目し、授業を通してグローバルな社会問題に対する児童・生徒個人の「個の価値判断」とクラス集団での「協働的な価値判断」を行っていくことが重要となる。そのためには、社会科授業を行う基盤であるクラス社会を、学級経営（教科経営）上、民主的な集団として形成しておくことが不可欠である。

以上の点から、社会科でこそ育むべきグローバル化に対応した資質・能力として、これら2つの価値判断を「グローバル化する社会の考え方」とし、授業構成する必要があるだろう。

IV グローバル化する社会の見方・考え方を育む授業開発の視点と系統性

では、実際の授業において、一体どのように異なる社会空間を関連させながら、グローバル化する社会の見方・考え方を子どもに育めばよいのだろうか。図3・図4を踏まえ見ていこう。

授業では子どもの発達段階を考慮し、これまでの校種・学年で学習する社会空間を入口とし（図4：顔印の位置）、そこから他の社会空間と関連させてグローバル化する社会の見方を育むことを基本とする。

ここでは、より広い範疇の社会空間と比較したり適

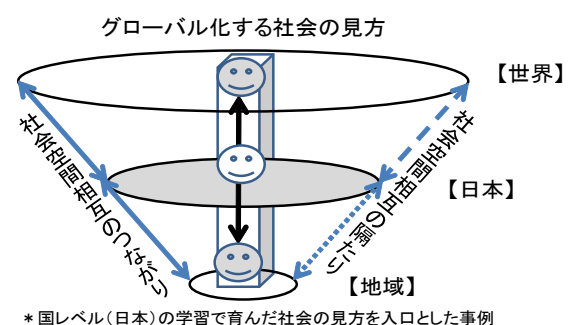


図3. グローバル化する社会の見方を育む方途

用したりすることによって（図4：矢印・破線無色の楕円範囲）、社会の見方を獲得したり高めたりしていく一方、先程とは逆向きに学習した空間レベルより身近な社会もとらえることによって（実線有色の楕円範囲）、子どもの認識を深めていく。子どもは、既習内容と関連させたり、自分との関わりをとらえたりすることで、グローバル化する社会の見方を育む必要性も実感できよう。

初等社会科の学習内容を基盤とする中等社会科の段階では、既に各空間レベルでの社会の見方が備わっていると見える。それ故、発達の最終段階である中等社会科では、地理・歴史・公民といった分野ごとの学習を通して、これまで育んだ社会の見方・考え方を深化・拡大させるとともに、どの空間レベルでも適用可能な客観的で多面的な社会の見方・考え方の育成をめざす。

ちなみに、社会の見方となる教育内容は、社会諸科学の成果に基づくグローバル化に関連する知識（理論）や概念（命題）となる。当然、グローバル化に直接関連する最新理論ばかりでなく、これまで子どもの社会認識形成で用いられてきた科学的知識や概念も含まれる。

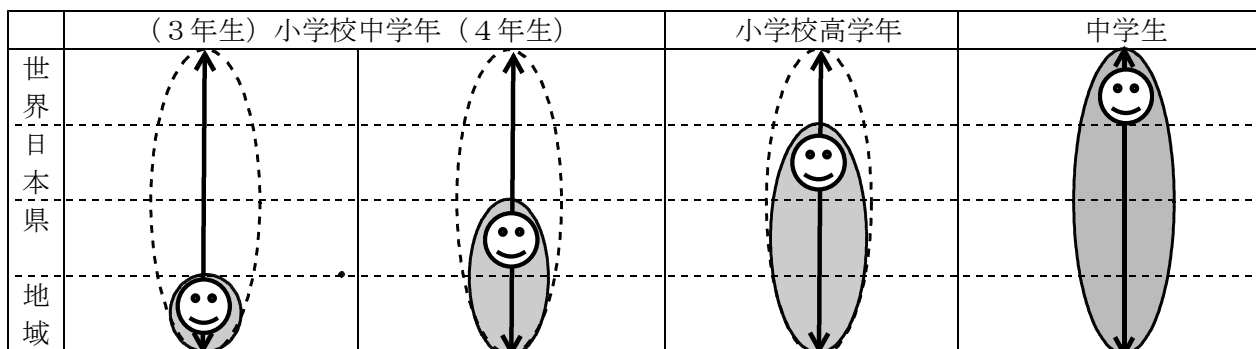


図5. グローバルな社会の見方を育むための発達段階に応じた入り口や社会の範疇

V. 本年度の研究計画

1 研究の目的

「グローバル時代をきりひらく資質・能力」につながる社会の見方・考え方を育むための授業開発

2 研究の方法

- (1) 本校が定義する「グローバル時代をきりひらく資質・能力」と社会科における公民的資質や学力との関連性について、これまで挙げられている教科を横断する汎用的な学力の特徴や社会科の目標・学力の変遷に関する文献を基に分析し、検討する。
- (2) 子どもの社会認識から公民的資質を育む社会科の本質を踏まえながら、「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育むための社会の見方・考え方や授業づくりのあり方を検討する。
- (3) 上記の検討を踏まえ、「グローバル時代をきりひらく資質・能力」につながる社会の見方・考え方を育むための授業開発・実践を行う。

【参考文献】

- 阿部健一(2009)「地産地消から知産知消へーつながりという『関係価値』ー」窪田順平編『モノの越境と地球環境問題』昭和堂。
- 阿部健一(2012)『生物多様性ー子どもたちにどう伝えるか』昭和堂。
- 阿部健一(2013)「価値を問うー『関係価値』試論」立本成文編『人間科学としての地球環境学』第2章、京都通信社。
- 岩田一彦(1994)『社会科授業研究の理論』明治図書。
- 内山節(2005)『「里」という思想』新潮選書。
- 内山節(2012)『内山節のローカリズム原論ー新しい共同体をデザインするー』農文協。
- 内山節(2014)『主権はどこにあるかー変革の時代と「我が世界」の共創』農文協。
- 木村博一(2002)『初等教育学の構想』『初等社会科教育学』協同出版。
- 木村博一(2006)「新しい学びにもとづく社会科授業開発の基礎基本」『社会認識教育の構改革ーニュー・パースペクティブにもとづく授業開発ー』社会認識教育学会。
- 木村博一(2015)「社会の見方や考え方を育てる社会科」日本教科教育学会編『今なぜ、教科教育なのかー教科の本質を踏まえた授業づくりー』文溪堂。
- 新谷和幸・中丸敏至・松岡靖・沖西啓子・伊藤公一・木村博一・永田忠道(2014)「グローバル社会に対応した国家・社会の構造を認識する社会科授業開発ー附属小学校3校の共同研究の成果としてー」、『広島大学学部・附属共同研究紀要』第42号、pp. 57-66。
- 新谷和幸・中丸敏至・伊藤公一・服部太・沖西啓子・木村博一・永田忠道(2015)「文化に焦点化した『グローバル社会学習』の授業開発ー附属小学校3校の連携を生かしてー」、『広島大学学部・附属共同研究紀要』第43号、pp. 153-162。
- 新谷和幸(2015)「グローバル化する社会をとらえ児童に公民的資質を育む授業とは」第64回全国社会科教育学会全国研究大会課題研究I(3)発表資料。